

2023年度 第1回豊岡市地方創生戦略会議 会議録（要旨）

- 開催日時 2023年5月31日（水）午後2時00分～午後4時20分
- 開催場所 豊岡市役所本庁舎 庁議室
- 出席委員 関貫座長、中嶋副座長、嶋委員、岡本委員、森田委員、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣（義）委員、高宮委員、宮崎委員、木村委員、森委員
- 欠席委員 平田委員、太田垣委員、古橋委員、西垣（由）委員
- 傍聴者 14名

1 開会

2 関貫座長（市長）あいさつ

座長 この地方創生戦略会議における議論は雲をつかむような話も多くなかなか調整が難しいと思いますが、今日は皆さんの意見をお待ちしていますのでよろしくお願い致します。

報告事項の内容を聞いていただいた後に意見交換をお願いしたいと思います。

3 報告事項

(1) 人口動態分析について

副座長 コロナが豊岡市の人口動態にどのような影響を及ぼしたのかということと、まだ完全に収束はしていませんがそれなりに落ち着くだろうという前提のもとに今後をどう見通すか、それからこの地方創生総合戦略で取り組んでいる内容に対してどのような意味合いをもたらすかということについて少しお話しさせていただきたいと思います。

資料1の2ページの要旨に今日お伝えしたい三点をまとめています。

一点目として、コロナが豊岡市の人口動態にもたらしたのは少子化と人口減少の加速であったということです。出生数がこの10年ほどで半減してしまいました。実はコロナ禍に入る数年前はすごく日本の景気が良かった時期があって、社会減が進んで出生数もどんどん減っていったのですが、そこに2020年からのコロナ禍によって異なる意味でまた拍車がかかってしまったことによって、本当に激減してしまったという状況です。この年間400人程度の出生数というのは、私が当初作成した本市の基準となる推計や国立社会保障・人口問題研究所による推計では2030年代の半ばくらいに到達するであろうと考えていた数値ですので、その数に早くもなってしまったということです。

それから二点目として、人口動態の今後の見通しのポイントとなるのは、この出生数の激減が一過性のもので終わるかどうかということだと思います。現在の経済状況やパンデミックによる医療状況などを鑑みて結婚や出産を控えるという行動が全国的に、あるいは世界的に起こったことは間違いありません。日本では歴史上初めて年間の出生数が80万人を切り、出生数激減というのは全国的なトレ

ンドというか現象になってしまっています。

この産み控えや結婚を少し伸ばしていたことが、コロナの収束傾向が今少し見られる中で、もしくはあと1年くらい待ったとして、反転することになるのかどうかということです。理論的にはそのように控えられてきたものは取り戻すのですが、私としては部分的・限定的な取戻しにしかならないだろうと考えています。その理由というのは、若い方たちが将来に対する希望や期待を漠然としか持てない中どうしても消極的になりがちです。いつか取り戻すつもりが取り戻せないままずるずるといってしまうことによって、一気に10年分くらい先の人口動態の姿が豊岡に訪れてしまってそれが当たり前の状態になってしまう可能性のほうが高いのではないかと考えています。

社会減については、日本全体の経済や景気の状態とのシーソーゲームのようなことになっていて、コロナ禍直前の2017年から2019年あたりの日本全体の景気が良かった時、雇用熱が高まっていた時期に日本人住民の流出が拡大しました。ですが、皮肉なことにコロナ禍になるとその流出に少し歯止めがかかるわけですね。あまり都会のほうで採用がされていないので、「それなら」ということで出ることを控えたり、帰ってきたりする人が少し増える。一方で、若い人たちの数をカウントする時に最近では技能実習生などの外国人労働者の方々をカウントしている、それほどに外国人の存在感が大きくなっています。コロナ禍ではなかなか新しい人が入ってきにくかったということで、技能実習生の方の数は半減以下に激減しました。ですので、日本人の流出に少し歯止めがかかった分と技能実習生の方々の入りが減った分の差し引きで、ほぼフラットな状態で移行したということになります。

今後の見通しとして、少しでも経済や景気の状態が良くなっていくとするとまた日本人の流出が悪化に向かい、その反動として豊岡の経営者の方々が外国人技能実習生の受入れを拡大し始めるということになるかと思えます。

最後に今後どうしていくかということですが、コロナ禍の影響を踏まえての今後の地方創生総合戦略の課題ということです。今回、事前に様々なデータや報告を見せていただいて改めて思ったこととして、これまでもこの会議で似たような発言を何度かさせていただいていますが、10年ほどこの総合戦略に取り組んできた中で、移住・定住者が窓口を通じて少しずつ増えてきたり地域おこし協力隊の方も50人くらいに増えてきたりしているわけですね。地域おこし協力隊に関しては全国的に見ても5番目、兵庫県ではナンバーワンです。これほど多くの協力隊を採用している、あるいは応募が来る自治体というのは珍しく、これも一つの成果だと思います。

それから専門職大学が開学して3年目となり、今の学生数が240人ほど、もう1年すると定員がすべてそろい320人くらいになるわけですね。教職員の方なども含めると300人から400人くらいの転入が起こっているということになりますし、技能実習生の方々をはじめとした外国人の受入れも社会減の対策という意味ではありがたかったことです。これは偶然だと思うのですが、専門職大学ができたこと

で新しく豊岡市に来た400人ほどと技能実習生のコミュニティというのはほぼ同じサイズです。地域おこし協力隊などもすべてトータルすると大体千人規模、少なくとも800人から900人くらいはいるだろうということで、大体豊岡市の人口の1%くらいになるわけですね。これは一定の成果として認めていいところだとは思いますが、ただ、量的な緩和に努めてその成果は見られてきたものの、一方で冒頭の出生数の激減を考えると心配な点もあります。

2012年から色々と取組みを進めてきた中での大きなイメージとして、子どもの数が減っているのはそもそも出産適齢期の女性の数が減っているというのが一番大きくて、次に結婚する人が減ってきていて、出生率はほぼ変わっていない。なので、この女性人口のところと結婚のところをなんとかしないと、母数が減っていく限り子どもの数が減ってしまうのはどうにもならない。社会減のところ頑張っただけで女性に選ばれるまちになることで母数の減少を抑えて、それによって自然減のところの子どもの数につなげていくという点で、女性人口の維持というのは重要な点ですね。ただ、この点と先ほどの千人単位の若い人の増加がリンクしていないというのが課題の一つではないかと思えます。

地域おこし協力隊の方にしても専門職大学の学生さんにしても、それから技能実習生の方々にしても、基本的には一時的な滞在のためにこのまちにいらっしゃる方々ですので、ぐるぐる回っているに過ぎないんですね。ここ4、5年くらいはそういった方々が来始めた時期ですので社会減が少し改善、あるいは少し下駄を履かせているような状態として見えていたということになりますが、2年後にはもう専門職大学から卒業生も出始めますので、80人新入生が来れば80人卒業生が出るということになります。何人かはこのまちに残ることがなければ、人口動態的にはひたすらプラスマイナスゼロの効果しかこのまちにはないわけですね。技能実習生の方々も当然ながら3年か6年、10年かもしれませんが、制度上は基本的には帰る人たちという前提で受け入れていますので、やはりぐるぐる回らざるを得ない。そうすると、結局、豊岡で家族形成をして子どもを産むということが想定されていない方々を一生懸命受け入れているだけであって、このまま同じようなことを続けていても、ここのリンクがない限りはたぶん出生数はどんどん減って行ってしまって、300人や200人になって行ってしまわないかというのが懸念される場所です。

そこで、人口動態の量的な改善に質的な改善を加えた展開をしていかなければならないのではないかとことです。必ずしも新しく来た方々を「残ってください」と囲い込むということではなく、こういった縁を持ってくださった若い方々といかに関係性を深められるかということです。その中にはもしかすると残ってくれる人もいるかもしれないし、出ていくけれども外からファンとして豊岡市を応援し続けてくれる人もいるかもしれない。5年か10年してまた違った縁がこのまちと生まれるかもしれない。これまでの取組みは量的な部分に対してのウェイトが高かったと思いますが、どのようにして関わり方を深めていくのか、関係性を作るのかという工夫のほうにウェイトを高めた形での展開が重要なのではない

かと思えます。

最後に「突き抜けた豊岡らしさに一層磨きをかけ、豊岡を極めること」と書いています。豊岡市は7万人程度の小さなまちですので、このまちから日本全体の経済や社会を変えとか希望を与えるというのはどうしても困難です。やれることとしたら豊岡が豊岡としてできることをやるしかないということで、ここ10年くらいで改めてこのまちを見つめ直して、「こういうところが素晴らしいんじゃないか」「こういうことをやっていけばいいんじゃないか」ということをやってきて、それで内外に評価されていることがいくつかあると思えます。これにもっと磨きをかけて突き抜けたものにしていって、それが面白いと思う若者を増やすこと、もうこれしかやれることはないと思えますので、それを信じてやるということだと思えます。

以上がお伝えしたい基本的なポイントです。ほかにもいくつか資料を出していますが、4ページでお示ししているのは出生数の実数値です。700人から800人いたのが今はもう400人と半減してしまったのですが、右のほうを見ていただくと各推計では400人台の出生数というのは2035年くらいを想定していましたので、加速してしまったということです。

7ページのグラフは、2000年代の後半と2010年代の前半後半、それからコロナ期の四つの期間で自然減と社会減のどちらがどれくらいこのまちの人口減少に影響を与えていたのかということ視覚化したものです。かつては社会減が65%でしたが、コロナ期ではそれが32%まで落ちてきました。ほとんどが自然減からきているということで、多少は死亡数も増えてきました。豊岡はそれほどコロナがひどかったわけではないですが、生活が変わったり人となかなか会えなくなったりして体調を崩したことが間接的に影響して亡くなった方が増えたのではないかと推測しています。社会減については先ほど申し上げたようにフラットな状態で、この3年間は日本人の動きが少し落ち着いたものの外国人の方々が入ってこないという状態でした。

今は大体三分の一くらいの社会減と三分の二の自然減によってこのまちの人口減少が続いていて、約千人規模で毎年減っていています。これがこのまま続くわけではありませんが、単純計算すると来世紀にはこのまちはないという、少し極端な言い方をすればそれくらいの規模で人口減少が進んでいるということです。

最後のページの右側に、参考として20～39歳女性人口や有配偶女性人口、婚姻数などを載せています。婚姻数も減っているのですが、一番ウェイトの高い女性人口そのものが減っていることや、社会増減のところでは窓口利用で入ってきている移住・定住者が20人くらいだったのが100人を超えるようになっているのが分かります。また、地域おこし協力隊の現在の隊員数や専門職大学の毎年の入学者数も載せています。経済指標では、GDPの成長率や求人倍率を見ると2018年から2019年あたりに景気が良かったということや、この時の日本人の転出を見ると悪化していてやはり呼応していたということが確認できます。

毎回自然減と社会減の数値をこの場で確認させていただいていますが、こうい

った参考資料と併せて見ていただくことで、背景にこういったことがあって自然減と社会減にそれぞれ影響を及ぼしているんだなということを改めて確認していただければと思います。

座長 ありがとうございます。人口動態分析という内容でいろいろと説明いただき、状況を皆さんにお知らせいただきました。

委員の皆さんも今まで豊岡にいらっしゃった中で当然これらの内容は感じていらっしゃったことと思いますが、この分析結果について何か感じたことなどございませんか。

K委員 すごく単純な質問ですが、コロナ禍の3年間で10年後の指標のような状態になってしまっているということで正直ショックを受けているのですが、ただ、収束に向けて世の中は動き始めています。10年後の状態になってしまっていることが少し緩和される可能性はあるのでしょうか。

副座長 先ほど申し上げましたように、結婚や出産を先延ばしにしていた分を取り戻して出生数が5年前くらいの水準まで戻れば少し緩和に向かうとは思いますが、かなり限定的・部分的な取戻ししか行われたいのではないかと。「よし、コロナが明けた」という気持ちをこのまちの若い方が実感として得られるかどうかは、「これからちゃんと働いて稼いでいける」とか、「だったら結婚できる」、「もう1人子どもがいても頑張れる」というような気持ちがこのまちで共有されるかどうかというところだと思います。それがプラスマイナスゼロでもなくマイナスに向かっているようであれば部分的・限定的な、統計を扱っている我々が目を凝らして少しは取り戻しているなどという程度、マクロの人口減少の姿が何か少しでも回復したかという目に見えるほど回復はしなかったということになるのではないかと思います。そして、結局は少子化を加速させてしまったところから我々は来年や再来年へと向かっていくことになろうかと思います。

ですので、小中学校の統合のスケジュールも、2020年代の後半から2030年あたりに向けてやっているというような話を伺っていますが、これを少なくとも5年くらいは前倒ししないと間に合わないかもしれないです。この3年くらいで激減しているので、「あれ、この地域突然子どもがいなくなった」ということが起こりうるかもしれません。

K委員 今まで取り組んできた以上に発信していかないと市民としての取組みが広まらない、根付かないということでしょうか。

副座長 そうだと思います。ただ、いくらでもリソースがあればいいのですが、たくさんお金が使えるとかたくさん人をつぎ込めるというわけではありませんので、結局やれることといえば知恵を絞って考えるとか工夫する、みんなで少しずつやっていくということになってしまうのではないかと思います。ただ、それができているまちがすごく楽しそうとかワクワクするまちということでもあると思うので、いかにこのまちがそのようになっていけるか。そのためには市役所に重要な役割があるのは間違いないので、その旗振り役というか応援役としてどう頑張れるのかということではないかと思います。

D委員 事前に頂いていた市役所の資料ではかなり経済や観光産業などが回復しているという数字が見えますが、副座長の資料では全国の求人倍率が上がれば豊岡市の社会減が増加しています。日本全体の経済が良くなれば豊岡の経済も良くなって人がたくさん入ってきてくれるのではないかと思うのですが、出て行ってしまいう人もいるということなのではないでしょうか。

副座長 あいにくなのですがそのとおりです。これは豊岡だけでなく全国的なことだと思いますが、やはりまだまだ若い人たちの暮らしやキャリアという面で大都市や大企業志向というのは変わっていない、できればそういうところで仕事をして活躍したい、そちらのほうが楽しいことができるのではないかという気持ちがあるのだと思います。景気が良くなって都市部の大企業の採用熱が高まってくると、新卒の方たちが就活を始めたときに容易に大企業の内定を取れる、そうすると最初から地元に戻るということは視野に入っていないわけです。そのことがこういった逆向きの関係を生んで、豊岡市に縁があった若者たちがすーっといなくなるということです。一方で、外国人や日本人の観光客が城崎などに戻ってきて人手がどんどん必要になってきたときに、豊岡で一緒に働こうとか城崎を盛り上げようというのが、豊岡に縁がある・ないにかかわらず若い人たちにどう伝わるのか、刺さるのかということだと思います。

J委員 私が仕事をしているところには障害をお持ちの方や引きこもりの方が来られるのですが、そこで見ているとなんでこの人がここにいるのかというようなことがあるんです。一昔前なら働き続けられているんじゃないのという感じの方がうちで農業をしているわけです。いろいろな個性を持った人がいていいと思うのですが、何か一定水準以上でないと社会に受け入れてもらえないとか女性にも選ばれにくいみたいな雰囲気があるんだろうなと思います。もう少し前はいろいろな人が適当に相手を見つけて結婚できていた、仕事を変えながらも配偶者がいて子どもがいてという一生を送っていたと思うんです。もちろんお金を稼げるかとか年収などもあるのですが、それ以前に期待に応えられる自分か、その期待に応えられないのであればステージが上がってはいけないみたいなプレッシャーが小さいころからずっとあるのではないかと、何となく私は見えています。

ではどうしたらいいのかというと、これまでは帰ってきてもらいやすい、住みやすいまちをつくってここに住む人を増やすということだったのですが、子どもを産み育てやすいということにシフトしていくのもありではないかなと思います。とはいえ、今は社会全体で自己責任というのが当たり前になってしまっているのです、子どもを産んだからには自分たちで育て上げないといけないみたいなプレッシャーがあって、そんなの無理だと思ってあきらめてしまう若い人も結構多いと思うんですよね。そこを励ましつつ社会全体で面倒を見るというような覚悟がないと無理だろうなと私は少し悲観的に見えています。それが難しいのであれば少しでも周りに優しい、ある程度人口が減っても楽しくやっついこうやみたいなの雰囲気があれば、ここでなら一人や二人は子どもを産めるかなという人もゼロにはならず横ばいとかちょっと上向きくらいになるのではないかなと考えています。

座長 ありがとうございます。聞いていて思ったのは、子どもたちの中に一定レベルでないとダメだというようなプレッシャーがあるのではないかと、結婚適齢期の方たちにも到底結婚生活や子育ては無理だと思って引いてしまう人が多いのではないかとありますが、前段の子どもたちにプレッシャーがかかっているというのは、どういったことで感じていますか。

J 委員 例えば学校で習う前に塾などでやっておいて学校で失敗させないようにとか、学校で失敗したらもうダメみたいな雰囲気はあるのかなど。私はそんなと思いましたが、親がそう思うこともあるでしょうし、結構委縮するような環境になっているのではないかと思います。

座長 口火として今お三方にご意見をいただきましたが、その内容に関連したことでいいですが皆さんいかがですか。

先ほどの分析結果のところ、絶対数でいうと子どもの数が減ってきているというのは数字を見れば分かるのですが、事象として断片的に見ると、一人の子どもを育てていてその子はもう小学生くらいになっている、だから次の子は考えにくいという夫婦もあれば、3人や4人、5人と産んでいらっしゃる夫婦もあります。ですが、そういった方が必ずしもいわゆる富裕層というわけではなく、普通に共働きの夫婦で5人の子育てを頑張っているという事象があるわけです。この違いは何がそうさせているのかというと、副座長はどう思われますか。

副座長 人それぞれだと思いますが、一つ大きな要因としてはその家庭の経済的にそれができるかどうかということがあると思います。あとはそれぞれの価値観というか人生観にもよるのかもしれない。

これが欧米になるとその価値観や人生観のベースにキリスト教、カトリックの考え方があって、生きていくことの価値の中に家族を形成するということの重要性がすごく強く説かれていて、それを強く信じている方からすると家族形成や子どもを儲けることをしない人生というのはないわけですね。なので、一人も儲けられなかった方々は「何か自分は欠けているんじゃないか」「自分の人生はこれではダメなんじゃないか」と常に悩みながら一生暮らすという、日本からすると少し馴染みのない文化や価値観かもしれません。

価値観や人生観というのは外からはなかなか介入しにくいというかすべきでない部分かと思えます。できるとすると、いかに若い方々が安定的に稼ぎながら暮らしていけるかとか子育てしている方々の様々な不安や不都合な部分を解消してあげられるかという、経済的な要因のところをサポートしてあげることくらいなのかなと。そのことによってもう一人というところの後押しをしてあげるということではないかと思えます。

座長 もちろん経済的に余裕がないというのは誰しも好んでそうなるわけではないので、そこに何かがないと前に進まないというのはあると思います。

H 委員 地域おこし協力隊の話がありました。確か豊岡市は人気でいうと全国3位というようなことを聞いたことがあり、それだけ豊岡市というまちが認知されて、行ってみたいエリアになっているというのは素晴らしいことだと思っています。私

は、ぜひ、そこのところを深掘りしていただきたいと思っていまして、何に惹かれているのか、まちやあるいは仕事の内容のどういったところに魅力を感じて来ているのかを知ることが重要ではないかと思えます。

地域おこし協力隊が増えているということは移住者が増えてもいいはずなのですが、そこはたぶんそこまで増えていないのではないのでしょうか。だとすると、3年間はいてもいいけど実際に移り住むには何かギャップがあるのではないかと。なので、実際に移り住んでいる人との差のようなものが分かれば次のことも考えられるのではないかと思っています。

先ほど副座長から城崎に観光客が戻ってきた時の人手について話がありましたが、確かにお客は少しずつ戻ってきていて、これから城崎に限らず日本全国観光業は人手不足になると思います。そこで取り合いが起こるわけですが、うちの旅館の募集に他の地域よりもすごく人が来ているかというところ、そういう感覚はありません。多分、靴やメーカーさんなどもそうなのかもしれませんが、きっとどこも人手不足で思ったほど採用できていないという感覚があるのではないかと思えます。

うちも技能実習生も雇っていて、期間は3年間で今は2人来ています。ただ、この技能実習生も世界の中で日本の人気なくなりつつありますし、城崎ですと採用できるかどうかだんだん分からなくなっています。あとは専門職大学の方にいかに残ってもらえるかというのが非常に大きなところなのですが、これも実習をやればやるほど簡単ではないなと正直実感しています。本当に優秀な学生さんが多いので、例えばJTBやJALなどでも合格してしまうような方が結構いるんですね。そういったところと勝負して勝たないと残ってくれないという厳しい現実があります。

とはいえ、実習に来てくれたり、色々なところで一緒になったりする機会もあるので、何とかたくさん残ってほしいと思っているのですが、簡単に残ってくれる状況ではないなというのは正直思っています。せっかく大学ができて4年間いて結局、どこかに行ってしまうということになると本当にもったいないことだなと思っています。これは私もそうなんですけど、地域全体でもうちょっと一緒に考えていていただきたいと思っています。

そのときはもう観光業だけでなく、靴でもメーカーでも第一次産業でも、せっかくなのでどこでも残ってもらったらいいと思うんですよね。なので、なんとかこの短い間で彼ら彼女らの目をもう一回向けてもらって、残ってもらえるようなきっかけづくりや仕組みづくりをしていかないと簡単には残ってもらえないのではないかというのが今の正直な実感です。

座長 地域おこし協力隊は色々な面で話題になりまして、先ほどのデータにもあったとおり現在は47名ほどが活躍しています。始まってからのトータルでは86名ほどという人数ですが、その中でどれくらいの方が残っていらっしゃるのか。

事務局 卒業された約半数の方がそのまま豊岡に残っていると聞いています。その半数が多いのか少ないのかはありますが、他の自治体の比率からすると多いほうだと

ということです。逆に半数はどこかに転出しているということです。

座長 現在の協力隊も卒業していくわけですからその人たちを留める手法の一つとしてOB・OGの方とのかかわりを持ってアドバイスをさせていただくということを進めています。

K委員 私のゲストハウスのオーナーが元協力隊員で、OB・OGとのコネクションもあって皆さんと一緒に続けていこうと頑張っています。ですが、その募集の内容自体が3年経ったらもう継続できないような内容、例えば、演劇祭のスタッフとなると演劇祭に協力隊の予算があるから雇えるのであって、それが終わってしまうともう予算がないから雇えない、残って引き継ぎたいけどできないという状況があるそうです。受入れ側は残ってほしいけど、向こうにしてみると残れない、どうしてというのは隊員の方からよく聞く話です。

あと、昨年も専門職大学の学生にどう残ってもらおうかという話があって、平田学長は「残ってくれ」とは言えないとおっしゃっていました。学問が一般の就職先に合うような内容ではないという部分もあるかと思いますが、豊岡の企業や、彼ら彼女ら自身が起業して自分の仕事を見つけることができるかどうかがすごく問題だと思っています。

座長 そのほかにいかがですか。

B委員 先ほど全国の有効求人倍率と豊岡市の社会減が反比例するとありましたが、現在は全国的に少しずつ経済が回復基調で、特に観光や飲食関係は回復してきているという状況です。そのあおりを受けて地方都市の社会減というか、地方に戻ってくる人たちは減ってきていると思います。副座長の資料の参考指標のところにある大卒の求人倍率というのは日本全体ですよ。

副座長 そうです。

B委員 但馬の有効求人倍率は、たしか兵庫県の平均よりもかなり高いですよ。かなり人手不足感が強いのですがなかなか人が集まらない。ただ、これも難しい問題で、実を言うとうちの会社などは求人を出すと人は来るんです。でも、履歴書を見ると入っても一年くらいですぐ転職している人がすごく多いですよ。やはり、量より質ということになるので、なかなか我々としても採用できるような人材が少ないというのも確かなんです。人はいるんだけどうまくマッチングできないというのが、観光業だけでなく製造業や靴産業など色々なところであると思います。

そういう状況の中で、先ほどの専門職大学の話でも観光業では非常に期待される人材があるんだろうと思いますが、やはり製造業などのメーカー関係にはあまり専門職大学の卒業生が入ってきてくれるだろうという期待もないし、だいたいのあたりのニュアンスは違うんだろうと思います。

工業関係が一つがっかりしているのが、但馬技術大学校の機械工学科が来年から2年制だったのが1年制になってしまうということです。今まで但馬の製造業者は割とそこの卒業生を採用していて、あそこは職業訓練校なので大学の卒業資格はないですが、企業側は短大卒くらいの待遇で採用してきました。それが1年

制になってしまうと1年でどれくらい学べるのかという不安があって、これから先ますます但馬の工業関係の事業者にとっては人材確保が厳しくなるのではないかと心配しています。

もう一つは在職者教育です。今は国でもリスクリングだとか専門職大学でもリカレント教育ということで在職者教育をしていただきましたが、こういったことも本当に豊岡や但馬では受ける機会が少ない。何か勉強しようとするとうと神戸や大阪に行かないといけない。そうするとお金もかかるし、一泊二日で行かなければならなくて非常にハンデがあります。比較的利用されているのが福崎にある中小企業大学の関西校ですが、あそこも来年か再来年には廃止になるということで、そうすると梅田校に行くしかなくなってしまいます。関西校だと大体、一泊2千円くらいで宿泊できたのですが、梅田だと自分でビジネスホテルを取らないといけないうし、ホテルを取るにしても今はインバウンドの増加で宿泊料金がどんどん上がっています。そういった面で企業の在職者訓練やリカレント教育がだんだんと難しくなってきましたし、企業に人がいないということもそうですが企業の質や競争力を高めることが非常に難しくなっているという気がします。

座長

なかなか難しい問題ですが、経営者の目線で考えるとそのように感じるというのは私もよく分かります。

技大の話が出ましたが、技大から人材を求める企業がこのあたりには本当にたくさんありましたし、今でもあると思います。そういった意味では企業のニーズが高いのは明らかですが、技大もできた当初は地元から行く子が多かったんですね。ところが、現状では1割以上が豊岡の外からの寮生活をしている人たちになってしまっていて、当然、自分の地元に戻っていくということになってしまっています。そういった実態もあり、先ほどB委員がおっしゃったような大学校の変化が起こってきたのではないかと感じています。そこにどう我々が手出しできるかというとなかなか難しいのですが、技大は県の施設ですので、県の方針に対して要求や要望をしていくことはできると思います。

若者が出て行って帰ってこないという現象は世の中が作り出していると思う人も多いですが、自分自身がそのように子育てをしてしまっていたというのも振り返ってほしいと私は思います。ただ、過去を振り返ってばかりいても仕方ありませんので、これから方向修正していけるのであればそのあたりも意識しながら、例えば教育の現場で子どもたちとの関わり方や思いを変えていくというのもありではないかと思っています。

外から人材を求めるというのは手段としては有効な手段となる可能性があります。今日本全国がそれをやっていますのでその中から選ばれるまちになるというのは難しいことだと思います。また、それによって「突き抜けたまち」と感じてもらえる、目を向けてもらえる可能性は生まれてくるわけですが、我々がそれをやるとなるとなかなか続けるのは息が切れてしまうということで、これは私見ですが、日本全国で競争をさせる国のやり方は考えてほしいと思います。

先ほど副座長のご意見で子どもの数はその家庭の経済力にもよるとありました

が、それは理屈としては成り立つかもしれませんが、しかし、市にその財力自体がないというのも現実としてあるわけですから、そういったことを選択してやっていくことはなかなか難しい。子育てがもう少し楽になるようにということもおっしゃいましたが、それが顕著なのが明石市で、子育てに関する内容が充実しているといっていると思います。しかし、あれを豊岡が真似できるかというところと全く無理ですから、「明石はあんなのに豊岡はこうだ」という意見はメールや提言等で頂きますが、そこを突かれるとどうしようもないというのが現状だと思います。多くの方々とやり取りすることによってそういった自治体にしていくというのが市の役目であって、そういったことで具体化できたこともあります、まだ一部であると感じています。

A委員

先ほどJ委員から、子どもたちの自己肯定感が低くなって「私なんか仕事しても、結婚しても」と思っている子が増えているのではないかと、それは教育に関係があるのではないかとのご指摘がありました。また、B委員からは、求人へのエントリーはあるけども長く続かないとか質的にどうなのかというお話がありました。それらを含めて考えるのですが、かつて25年くらい前に不登校が社会で大きな問題になった時に、子どもの心を傷つけるからそんなことになるんだということで歪んだ平等性がすごく闊歩したことがあって、マラソン大会や運動会ではみんなで手をつないでゴールするという学校まで出たことがありました。今はすっかりそんなことは卒業してしまって、多様性ですよ。走りが速い子もいれば遅い子もいる、楽器が上手な子もいればそうでない子もいると。学力的に高くはないけれどもすごく優しくてコミュニケーションが上手という子もいるかもしれません。お互いにそういうことを認め合って自尊感情を高めることと、先生たちがそれを認めていこうということになっています。

豊岡もずっとその取組みをしていて、全国学力・学習状況調査に「朝食を食べているか」とか「どんなことに興味があるか」といった質問が50問くらいあるのですが、その中に「自分にはよいところがあると思うか」という項目があるんですね。小学校6年生の全国の平均が79%、豊岡市は82%なのでほぼ同じです。でも、「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」に関しては、全国が87%に対して豊岡市は92%と有意に差が出ています。先生たちもその努力をしているということなので、それを小中学校でやっていく。ただ、高校入試や大学入試もありますので、どの時点で差別や選別が起こって自己肯定感が下がっていくのかということは全体として見なければなりません、今私たちがやっていることの方性はそんなに間違っていないのではないかと思います。

二つ目はふるさと教育です。小学校3年生以上で、同じ教科書と同じカリキュラムを使って「コウノトリ」「ジオパーク」「産業・文化」の三つを中学校3年生まで勉強します。市内の一学年大体145人ほどの中学校で、今年で3年目となるふるさと学習の集大成として自分たちが豊岡のことを考えるという学習をしています。今までの学習を振り返ったり講師を招聘して豊岡のまちづくりを聞いたりして、豊岡の課題は何なのか、その課題を解決するために自分たちにどんなことができ

るのかをグループで考えます。面白いのが、その学習が終わった後に感想を聞くと、「豊岡が好きか」は事前も事後も約8割でしたが、「自慢できることはあるか」では、4月の学習前は81%だったのが学習後では89%になっています。このあたりはすごく順調なのですが、「将来豊岡に住みたいか」を聞くと学習前の19%が学習後には11%に下がってしまう。

「これは何なんだ、自分たちがやっていることが間違っているのか」と思うのですがそうではなくて、口述では『一番思ったのはやはりこのままだと豊岡がさびれてしまうということです。そのために何かしらの変化が必要だと思いますが、そんな簡単なことではないです。僕たちにできることはSNS発信などをやっていくことだと思いました。現状維持は衰退という考えを持って本気で取り組みたいと思います』と中学生が言っています。

また、結構辛辣なのが『私は正直、豊岡に愛着がありません。豊岡に4年制総合大学がないから高校を卒業したら豊岡を出て、豊岡は嫌いじゃないけど特別戻ってくる理由もないから人口がどんどん減っていくんだと思います。あえて戻ってこよう、引っ越そうと思ってもらえるような取組みを自分でも考えたけど難しかった』。それから『少子高齢化が進んでいて若者向けの店を出しても絶対に繁盛するとは言い切れない部分があると思うので、絶対いい結果を招くという点を考慮した取組みは難しいと思いました』。社会の様子を聞いて子どもたちはこう考えているんですね。

それから『豊岡の課題を考える中で、課題の元凶の多くが人口減少ではないかと感じた。いくつもの班が人口減少について取り上げていて、将来人口減少を食い止めて豊岡をもう一回盛り上げていきたいと思った反面、そんなことは豊岡市の職員さんだったら気が付いているはずです。これからは市がどのような活動をしているか知りたいと思いました』ということなので、今年からこの学習に市の職員が一緒に入って、市の職員だけでなく地元の大人たちもいろいろと考えて努力しているというアピールをしていきたいと思っています。

職員は学習後に19%から11%に下がった要因をこのように捉えています。『将来豊岡に住もうと思う生徒は増えなかった。学習を進め様々なことを調べる中で、豊岡の欠点や不足している部分がマイナスイメージとして生徒に印象付けられてしまったことが原因だと思う』。だから、中途半端にやってはダメだということです。やるんだったらきっちりみんなやっていく。市長も今年からふるさと学習の一コマを持っていただいて、中学校で話をさせていただきますので、その中で市長も自ら旗を振っているし、このような会も持っているということをアピールしながら訴えていくということかなと思います。去年もこの話はしましたが、似たような傾向が今年もあったということです。

座長

ありがとうございました。今のA委員の内容も、色々な話をここですということの一部であったと思います。

次に次第の「(2) 2022年度地方創生事業の実績」について報告していただきます。

(2) 2022年度地方創生事業の実績

<事務局より資料2～5に基づき説明>

4 意見交換

座長 副座長は今までの委員それぞれのご意見の内容を聞かれていかがですか。

副座長 H委員が先ほどおっしゃっていたことに改めてレスポンスさせていただきたいと思いますが、「SMOUT」ですかね、地域おこし協力隊などを募集するサイトで非常に豊岡市が注目されていて、なぜああいうところで豊岡が注目されるのか、人気があるのかということです。

もちろん、これはデータを取っているわけではありませんが、内外で最近豊岡が頑張っているなどと思われることといえば、やはり演劇関係ですよね。地域おこし協力隊の方が実際にどういう活動に関わっているのかを拝見すると、受け皿の側がそれを利用して人材を引っ張っているからということもあると思いますが、やはり演劇祭に関わっていることが多いと。

それから、先ほど座長から明石市の話が出ていましたが、私は少し前まで神戸市の人口委員会というところの委員をやっていて、半分は行政の担当課の方々、もう半分は有識者という会でした。そこでも明石市の話題が大体出のですが、明石と接している西区とか垂水区、須磨区などに住んでいた住民が今は明石側に流出しているというのが数値でも表れていて、「これはちょっとまずい」ということで、地方創生や子育て関連の施策で明石市がやっていることに対して神戸市が何をどこまでやっているのかという対照表を作って、何か違うのかということを経査したことがあったんですね。そこでの結論はかなり驚きだったのですが、「大して変わらない」ということでした。明石市がやっていることと神戸市がやっていることは、プロの目で見ればさほど変わらない、実質的には同じなんです。

何が違うのかというと、明石市がやっていることは分かりやすいんです。細かい専門的な制度設計や施策設計にはなっていないで、「こういう条件を満たした人がもらえます」という対象者の方が窓口に行って担当者から説明されないと分からない、あるいは説明されても分からないけどいくらお金がもらえとか、そういうものではないんですね。「なんか明石はすごく頑張っている」ということが一般の方でもすぐ分かる。要するに、どういう政策をやっているのかとかどれくらいお金をつぎ込んでいるのかというより、宣伝効果の問題なんです。市長自らが「この部分は頑張っています」と分かりやすいことを掲げてやっておられるという感じですね。

ですので、ぜひ、豊岡市の市長にも「3本の矢」ではないですが三つくらいは旗印を作ってください、「豊岡市はこういうまちです」「これを頑張っています」ということを分かりやすくやっていただくと、それが先ほどの突き抜けたという部分にもつながってくると思います。メリハリとといいますか、優先順位を付けるための合意形成をするのがこの戦略会議の場だと思いますので。

もう一点、採用の件です。H委員などはまさにロールモデルなのではないかと

私は思うんですが、必ずしも新卒者をどれくらいこのまちに留められるのかという話ではないと思うんですね。博報堂と作ったポスターでは「元気にこのまちを出て頑張って勉強してこい」と送り出すわけです。ただ単に大学に行かせるというだけではなくて、とにかく20代というのはがむしゃらに修行してこいと。都会も知ったし、大企業も知ったし、そこでの暮らしや働き方も大体学んできた。ここからはもうどこに行ってもやれるんだという自分になって豊岡に戻ってきてくれればいいわけです。そういうような方が増えてくればJALやANAも結構じゃないですか。5年や10年して城崎を盛り上げてくれる中堅リーダーたる方々が一人また一人と、H委員のような方の後を追って出てきてくれるのが理想的なのかなと思いました。

C委員

私は子育て世代なのですが、朝食をしながらテレビを見ていると暗い話が多いんですね。ああいうのを子どもたちが毎朝見て学校に行くのが嫌でしょうがなく、テレビをつけたくないなと思うんです。もう少し大人たちが明るくしていないと、子どもたちにマイナスのことが毎日刷り込まれていくようなことは良くないなと思います。なので、先ほどA委員から豊岡の子どもたちは自己肯定感が高いという話があってすごくうれしかったのですが、それは先生方の努力があってこそだと思います。

この地方創生戦略会議においても皆さん前向きだと思うんですが、冒頭の出生数がこんなに下がってしまったというのはショックですよ。でも、経営者はやはり「ピンチはチャンス」なんですね。こうなったら次は絶対何かをやらなきゃ、今までどおりではダメだと。先ほど副座長からこれだけ産み控えがあったけれども反動で産むとは限らないとありましたが、じゃあその後押しを市がしないとそれは増えないです。子ども医療費の無償化にしても、市長が「産み控えていたお母さん安心してください。無償化が始まりましたよ」というように言っていたかないと、こんな少ない中で産んでもいいんだろうか、「仕事もなくて但馬では生きていけないのではないか」、「家族で引っ越そうか」みたいになってしまいます。

皆さんの意見を聞いていて思ったのは、専門職大学も1回生だけの時は演劇の発表が一つあったくらいだと思うのですが、今は結構数があるんですね。しかも無料です。日中だったら行きにくい人もいるかもしれませんが、そうやって学生たちが演劇の発表をしているということを市民がどれくらい知っているのか、学生たちと話したいんだけどなかなか話す機会がないという方のほうが多いのではないかと思います。小学校の子どもたちは演劇祭のチラシやパンフレットをよく持って帰ってくるので分かるかもしれませんが、それこそこれから豊岡で子育てしていきたい人に向けての発信がもっとあればいいなと思って聞いていました。

インターネットで「HIBOCO」というのに登録しておけばそういった情報も入ってくるのですが、あれもどれくらい認知されているのか分かりませんが、学生が自分たちで発信しているんですね。そういう中で「あの芝居すごかった」というような出会いがあれば、それこそJALやディズニーランドなどと競合しても但

馬に残ってくれる学生も増えるのではないかと考えています。子どもたちに残ってもらうためには今背中を見せている我々が楽しそうにしていないと、それはここで一緒に過ごそうとはならないと思います。

発信の仕方也是如此ですが、データやグラフで特にこれが急に上がったというのであれば、なぜそうなったのかというのをもっと共有していただきたいと思います。神鍋の観光協会さんですが、「今年はコロナ前の65%でした」と言われてがっかりしたのですが、そういう報告があれば「ゼロだったのが65%になったんならいいじゃん」ともなりますので、そういうふうな発信の仕方に全体がなっていっていただきたいなと思います。

子どもたちが少しでもわくわくするような種まきを大人たちがしていく義務というか責務があると思いますので、よろしくお願いします。

I 委員

統計を取ったわけではないのですが、竹野には3人や4人、5人以上お子さんがいる家庭も結構あるんですね。少ないと言う割には産んでいる家が多いなというのが私の体感なのですが、ママトークでも「あの家3人目ができたんだって」「え、うちもいくか」というのが結構あるんです。なので、少しつらわれている空気があるんだろうなというのは体感として思います。

私が3人目を産んだ時は、市が3人目お祝い金をなくしていたんですよ。もらえるつもりでいたのに調べたらなくなってすごく衝撃でした。ぜひお祝い金に「豊岡クーポン10万円分」とかやっていたかと頑張れるかもしれないです。出産で何がつらいかというと、10か月お腹に入れておくことがとてもつらいんです。あれが2か月くらいで産めるのであればもう4、5人いてもいいかなというくらいつらいので、そこを何かやっていただけると。そんなに市にとっても痛手ではないでしょうし、きっかけで本当にそれくらいのことだと思うので。

あと、竹野はやはりサービス業が少なく土曜日のこども園の受入れの時の態度があまり喜んで受け入れてもらえないので、土日でも喜んで受け入れていただけるような体制、というところやはりこども園や保育園の先生の給料アップをしていただけると、もう少し明るく受け入れていただけるんじゃないかなと思います。先生方はとてもいい方たちなので、これは体制の話だなと思っています。

今日言わないといけないと思っていたのは、最近のカップルはマッチングアプリでかなりカップリングが成立しているので、「豊岡マッチングアプリ」は絶対作るべきだと思います。Mさんは仕事で豊岡に来てこのまちに住みたいと思っていたところ、たまたまご主人と出会って嫁入りしてとてもうれしかったと聞いているので、豊岡に住むのに素敵なおところという認知がされれば、そこにお嫁に行ってもいいと考えている女性は絶対いると思うので、ここに登録しておけば豊岡の人と出会えてそこにお嫁にいけるかもというコンセプトのアプリを作っていただければなど。これもそんなに元手はかからずやれるようなことだと思うので、ぜひやってほしいと思います。

うちはよく2年契約でスタッフを雇っているのですが、ほぼみんなマッチングアプリで一杯飲みに行く相手を探しているの、これは絶対やるべきだと思います。

す。私の夫も17年前に出会ってこちらに婿入りしてきましたが、友達からどこで出会ったのかと聞かれていたらしいので、遠方に嫁いだり婿入りしたりするのはちょっと憧れられるというか、そういう風潮があるのかなと思います。

A委員からふるさと教育のお話がありましたが、私の子どもは今高校1年生と中2、小4ですが、ここ数年すごく子どもたちがふるさとを大好きになってきているなというのを肌で感じています。去年の夏にアルバイトに来てくれていた阪大の子は、妹がトライやる・ウィークでうちの会社に来てすごく良かったからアルバイトに応募したということでしたので、地元が好きでアルバイトくらいは帰ってこようかなと考えているんだなというのを感じています。

統合の委員会の時にA委員には言ったことがありますが、豊岡の真ん中に「豊岡学園」を建てて、へりで通学できて世界最先端の教育が受けられるというくらいの学校を作ってもらって、みんなで明るく過ごせるのがいいんじゃないかなと思います。

G委員

専門職大学の学生や地域おこし協力隊の方と話すことがあるのですが、聞くとほとんどの方が「ようこんなところに来なったな」と言われる。こんな良いところなのにそんなことを言われるのが不思議だと言うんですね。私も本当にここに住んでいて良かったと思うのが、素敵な音楽を楽しめたり演劇を楽しめたりします。私の母親などは82歳になって初めて個展を開いて、色々な方にサポートしてもらいながら300人の方に見ていただくことができました。文化的な環境がすごく整ってきていると思うのですが、それに気付いていない豊岡市民が多いのではないかなという気がしています。

ただ、「ようこんなところに来なったな」という人たちがいるからこそ、受け皿がしっかりしているのかなと思います。協力隊が47人もいて大きなトラブルもないですし、他の地域では協力隊を卒業してカフェをやっていたら突然、「出ていけ」と言われたというようなニュースもありました。数が多いとリスクなのですが、しっかりと根付いているという豊岡の受け皿はすごいなと感動しているところです。

今トライやる・ウィークをやっていますが、去年携わらせていただいたんですが、コロナの影響もあって第6希望や第7希望という子が結構いたんですね。行きたいところに行けていない。先ほどもマッチングの話がありましたが、きっとそのあたりにも参考になるような数字が出てきているのではないかと、就きたい職業に就けていない子がすでにそこで出ているということではないかと思っています。今年も聞いてみるとやはり第3や第4希望がいて、せめて第3希望くらいには収まるような受け皿を作っていただければと思うんです。というのが、進学で出ていくばかりではなくて、就職で出ていく子も当然いるんですね。就職で残る子もいるけれどもマッチングがうまくできていないところもあるのではないかと思うので、しっかりと受け入れできるようなシステムを作っていただければと思っています。

私は情報発信も兼ねてインバウンド向けのタクシードライバーを時間が空いて

いる時にやっているのですが、豊岡は富裕層の方がお金を使うところがないと。城崎温泉に泊まって天橋立、伊根が黄金ルートで、泊まるなら城崎がいいけど過ごすところがないのであっちに行ってしまうということです。

この前びっくりしたのが、旅行会社の人たちが空き時間に「何かないか」と聞いたところ、京丹後にある刀鍛冶に行ってくれと言われて、そこに寄るとなんと何十万とか何百万の刀が売れるらしいんですよ。すごい経済効果になるんじゃないかなと思うのですが、やはり豊岡周辺にはそういうところがありません。TTIとも話しているのですが、せっかく城崎という拠点があるのに富裕層をちゃんと受け入れられるところがないのが残念だなと思っています。

先ほど学生たちとの接点という話がありましたが、私は朗読劇の部活を作ったんです。学生も入っているし、青年団のスタッフや高校生も入っていてすごくいい化学反応ができていますので、こういった部活がどんどん広がっていけばまた面白くなっていくのではないかなと思っています。そこでお願いしたいのが活動費で、すごく小さな支援でもいいと思うんですよ。要件を満たせば1万円だけでも、認められた感が欲しいというのがありますので。こういった輪が広がっていけばまた学生たちも面白くなって、面白いまちが展開されていくのではないかなと思います。

座長 トライやる・ウィークについてですが、第7希望まで書けるということですか。
G委員 第何希望までかは分かりませんが、第7希望でしたという子が何人かいましたので。

A委員 コロナも原因なのですが、遠慮したいという企業がだんだん増えていて、子どもたちの希望はそこでなくても学校や園は受け入れてくれますので、そこに第6希望や第7希望として書いている子が行くということはありません。コロナも5類になって落ち着いているので参入していただける企業を探す必要があるかなと思いますので、人気のある企業にお願いできませんかという話はしていきたいと思っています。FMジャングルも入っていましたよね。

E委員 うちもコロナで人数を減らしてしまっていて、今回は北中から二人と日高東中から一人でしたが、その東中の方も何人かの中からくじで当たったという子が来ていました。コロナの前であれば6人は受け入れていたのですが、やはり生放送のスタジオの中に6人、7人も入ると大変密になるということで今は3人にさせていただいています。来年は枠を広げられればと考えていますし、そういう企業は多いと思います。

B委員 どういう業種というのを言っていただければ商工会からそういうところに声をかけることもできますので、ぜひ、要望いただければと思います。

K委員 受入れ先というのはどのように募集されていますか。私もゲストハウスなのでぜひ、来ていただきたいと思うのですが。

A委員 今まで受け入れていただいた企業にお願いをしていますが、新規はどのように募集しているのかはちょっと分かりませんので、またぜひ、連絡させていただきます。

座長 今までは確か学校が企業にお願いしていましたよね。

A委員 トライやる・ウィーク推進協議会というのがありますので、そこが中心になってこんな業種があるのでリクエストしてみてくださいとやっています。

座長 トライやる・ウィークももう長いですよ。

A委員 長いですね。須磨の事件が起きたことをきっかけに始まりましたので。

座長 事業者はたくさんあって行ける可能性があっても、受け入れる側としては気遣いをもっとしなければならぬという状況があるんですね。かつ、我々が子どもの頃はそうではなかったですが、もう少し後の保護者になると現場に写真を撮りに来たり、ちょっと厳しいことをやらせるとそこで見ていた親がカチンときてしまったりということもありますので、親のスタンスとしてはそこも改善すべきところかなと。

F委員 I委員から3人目、4人目の子どもという話がありましたが、この会議が始まって3年くらい経ったあたりに、3人や4人子どもを産んでいる方になぜ産もうと思ったかを聞いてみたいという話が上がったことがあるんですね。それよりもさらに4、5年前に、検診の場で50人ほどのお母さんたちにインタビュー調査をさせてもらったことがあるんです。そこで面白かったのが、たくさん子どもを儲けていらっしゃる方は「自分や夫も3人きょうだいだったから」、「3人や4人は当たり前だったので、自分の祖父母も応援してくれた」という意見が圧倒的に多かったんです。もちろん、中には「自分が2人きょうだいだったからもう一人欲しかった」という意見もありましたが、たくさん子どもがいる方はみんなポジティブな意見でした。

もう一つ皆さんがおっしゃっていたのが、お金の問題がよく出てきました。ただ、皆さん工夫はされておられて、例えば、3、4人の子どもの大学が重ならないように産んできたとか、工夫もされていました。なので、上の子が下の子をかわいがってくれて、人数は多いけどその面ではすごく助かっているというポジティブな意見がすごく多かったんですね。

最近はどういった調査はしていないのですが、ただ、お母さんたちと話をしているとそのあたりの価値観が大きく変わってきているような感じがします。例えば、今はお母さん自身が一人っ子や二人きょうだいだったという家庭も増えてきているみたいですし、「当たり前」という考え方が以前と今、この会議が始まった頃と今とでも全く変わってきていると思います。

その当たり前が変わりつつある中で行われている、演劇を活用した授業やふろさと教育ですね。私は先日初めてそれを動画で見せていただいて、こんなことを学校でしているのかと思いました。私の同僚の保護者の方に聞いても、あの動画を見た時に我が子がこんなことをしているのかと感動したとおっしゃっていた。ところが、見ていなかったのでも今まで分からなかったんですね。「こんないいことを学校でしているならもっと保護者に見せたい」、「我が子が演劇的手法を通してどんなことを学んでいるのか知りたい」という声も聞いていますので、そういう面では教育の中で価値観というか、人との付き合い方が豊岡でも変わってきてい

るのかなと。でも、それはすごく時間がかかることなんです。時間がかかるからと途中でやめてしまうのではなくて、時間がかかってもいいからずっと続けていくということが最終的には突き抜けた豊岡の良さになるのではないかと思います。

もう一つ、人との関わりを極端に嫌う方やできるだけ人と付き合いたくないという方が、以前からいらっしゃいましたが明らかに増えてきています。子どもがいれば子どもの数だけ付き合っていないといけないのですが、それが面倒というか負担に思う人が増えてきていますね。そういった意味ではコミュニケーションの面でも今の豊岡の教育というのはすごく大事ではないかなと私は思っています。子育て総合センターがアイティの7階から4階に移って私たちの関係も大きく変わったのですが、今までのような受け入れ方ではお母さんたちとお付き合いできないので、私たち自身も変わっていかないといけないということで朝1時間会話のトレーニングなども行っています。すぐに効果が出るかは分かりませんが、良いと思うことは時間がかかっても続けていくことが必要ではないかなと、今日の皆さんのお話を聞いて改めて思いました。

おんぷの祭典もずっと続いています。今日もアイティの7階に親子で見に行った方がたくさんいて、何年か前にお子さんを連れて行ったというお母さんにさっき話を聞くと、「あの時にそばで聴いてもいいし、楽器の近くで聴いてもいいと言われて、あんな場所があるなんてここならはだし、あの思い出は今でも私の中に残っている」とおっしゃっていました。そういう豊岡にしかないものの情報発信というのが私たちも含めて豊岡はまだまだなのかなというのと、それから続けるということをあきらめずにやっていくことが大事かなと、今日の皆さんのお話を聞いていて思いました。

E 委員

今日は出生数の激減がすごく衝撃だったのですが、コロナの影響もあったかもしれないが推定よりも10年ほど前倒しになっているという状態を見て、大変なことだなと思いました。かといって、結婚しなさいと言ってすぐ結婚するわけではないですし、産みなさいと言って子どもが産まれるわけでもないですし、どのような工夫をしていけばいいのかとちょっと不安な部分もあったのですが、そんな中で地域おこし協力隊の話題は希望の持てる内容でした。全国色々なまちがある中、なぜ豊岡市の地域おこし協力隊が注目されているのかを深掘りしたほうがいいというH委員の意見は本当にそうだと思いますし、そこに何かヒントがあるのではないかと思いますので、ぜひそこは研究していただきたいなと思います。

「豊岡にはこういうものがあるいいところですよ」、「豊岡に移住してみてもどうですか」とただ発信しているだけでは、なかなか見ていただけないし移住はしていただけないと思います。私もラジオをやっていますが、一番気を付けているのは自分がまずは楽しむということです。自分が楽しければ聴いている人も楽しいだろうという思いでラジオをやっていて、その中で生まれたのが但馬弁を英語にするという番組です。仕方なく作った番組なのですが、私たちがすごく楽しんでやっているので意外と新規のリスナーさんがたくさん聴いてくださってよかったなと思っています。

色々な発信の仕方があるとは思いますが、豊岡に住んでいたらこんなことが楽しいということを発信していくのが良いのではないかなと思います。

座長 FMジャングルはインターネット上でも聴けるんですね。

E委員 はい。日本全国だけでなくアメリカからもリクエストを頂いています。

座長 C委員からも楽しくしている大人たちの姿を見せないと子どもたちには通じないという意見が出ましたし、そのあたりも意識しながらPRを考えていきたいと思います。

D委員 皆さんの意見を聞いて私も同感だなと思っています。長期的にはやはり演劇や音楽といった芸術文化や教育などに力を入れているまちだということをアピールして、それを豊岡の柱に位置付けて20年や30年後に子どもたちが帰ってくるということを目標にしていくことが大事なのかなと思いました。ただ、20年や30年先までどうやって持ちこたえていくかということも考えていかないといけない部分だと思っています。地域おこし協力隊の方々もそうですが、ほかにもIターンやUターンでいろいろなところから入ってくる人がうまくいかないこともあると思うんですね。そういう時にどうやってフォローするか、そのフォロー体制をできればもう少し強化していただきたいという思いがあります。

この先も転入してくる方にたくさん入ってきてほしいと思いますが、実際に入ってきて思っていたのと違うとなったときにどうやって周りがフォローしていくかというところの体制を整えてほしいなと思っています。

もう一つ、外から来た方が豊岡にどんな魅力を感じているのかということですが、私の大学生の娘が演劇サークルに入っていて、今週末そこのメンバーと一緒に豊岡に来るんですね。今年は香川県の三豊で演劇の公演を行う予定なのですが、豊岡にも行くとなると行きたいという人があれよあれよと増えていって、当初は5人の予定だったのが10人になってしまったんです。あれも見たい、これも見たいと皆さんおっしゃっていて、魅力は確かにあるんだなというのが分かりますので、何がそんなに魅力なのかというのを彼らに聞いてみたいと思っています。

座長 そういった意味では豊岡には魅力があるんでしょうね。魅力があって来ていただけているというところまでは割とイージーに進んでいると思うんですが、それだけで終わってはダメだということも言えますね。

D委員 そのうちの一人はすでに定住されています。その先輩に会いたいということでみんなやって来て、どんどん人が集まっているという状況です。

外から豊岡に入ってきたけど思っていたのと違ったなというような小さいこともいっぱいあると思うので、そういうのをフォローアップできるような機関があればと思いました。

座長 これだけの人数の方々に集まっていただきましたのでいろいろな意見が出ましたが、後半に出た意見に対して副座長、いかがでしょうか。

副座長 では一点だけ。私も子育て中で大体毎週土曜日は子育て支援の施設に子どもを連れて行って、遊ばせているのを視野に入れながら自分はパソコンで仕事をしているのですが、アイティ4階の子育て支援の施設ができて初めて豊岡に帰ってき

たので、先ほど視察がてら一通り見てきました。あそこが今どういう主体による運営なのかなどを存じ上げていないのでどれくらい厳しい言い方をして良いのか分かりませんが、前市長の任期中に物議を醸しながらもなんとか形になってということだったと思うのですが、ちょっと改善の余地があるなと思いましたね。あれだけ話題になったのにこんな感じだったのかと、ちょっと残念な思いをしながら見てきました。

一つは、子育て支援の施設やサービスはこうあるべきというところにちょっと固執しすぎていて、もうちょっと柔軟に考えたほうが良いと思うんですね。私が頻繁に利用している神戸の施設は結構お父さんの利用が多いんです。そこでは私のようにパソコンで仕事をしている人もいますし、頼めばコーヒーやお酒も出てきます。夜はカラオケ教室などもやっています。今のアイティの施設というのは、基本的には家でお子さんを見ている主婦のお母さんが今日はここでといて連れて行くとか、ファミリーサービスでお父さんが半年とか1年に1回気合い入れて連れて行くみたいな感じでないと利用できないと思うんですね。そうでなくて、親が趣味でも仕事でもやらないといけないことをやりながらでも子どもを遊ばせられるみたいな、そういう柔軟性があの施設のデザインやプログラムには欠けていて、改善の余地がいっぱいあるなと思っていました。

もう一つはファミリーサポートセンターの会員数ですね。最新で330人ということなのですが、せめて2千人くらいは欲しいですね。まだ、年間400人くらいは子どもが生まれているわけで、本当に思案をしている人というのは少なく見積もっても千人規模くらいにいると思うんですよ。これはもう大キャンペーンをやって会員数を増やしていただいて、なおかつ施設が柔軟なプログラムや空間になっているという併せ技でやっていかないと、施設の数を増やしていただけないですし、施設のお金も使っていただける余裕は全然ないわけですので。工夫を集めて総動員でやるしかないということだと思いますので、そのあたりに期待したいし、希望を持ちたいと思っています。

座長 ありがとうございました。それでは時間も迫ってきてしまいましたので、これで意見交換は終わりとさせていただきます。最後に「第2期豊岡市地方創生総合戦略の改訂について」とありますので、説明をお願いします。

5 その他

第2期豊岡市地方創生総合戦略の改訂について

＜事務局より改訂の内容について説明＞

6 閉会